

第10回 Options for influenza control (Options X)参加報告

(2019年8月28日～9月1日開催，於：シンガポール)

城野洋一郎

Kino Consulting 代表

2019年8月28日より9月1日まで、第10回 Options for influenza control (Options X)会議に参加したので、概要について報告する。前回の2016年シカゴ大会に続き、今大会はシンガポールの国際会議場 SUNTEC で開催された。2003年の沖縄、2010年の香港に続くアジア地区での開催であった。3、4年おきに開かれるインフルエンザ領域最大の会議であることから、5日間の長丁場にもかかわらず、広い会場は連日賑わっていた。

初日は、開会式に先んじて、中国のインフルエンザ研究に関するセッションが行われ、人畜共通感染症の観点からのインフルエンザと生薬関連の研究が紹介された。開会式に続いて、若手奨励賞の授賞式が行われた。その後の基調講演では、季節性、パンデミックインフルエンザのインパクト、最新のインフルエンザ研究に関する発表があった。学会のレセプションディナーに続き、ポスターセッションから学会が始まった。会の名前にも表れているように、季節性、パンデミックインフルエンザの予防、コントロール、疫学

を中心とした演題が多く、3つの会場で併行してセッションが行われた。各セッションは、Virology & Pathogenesis, Clinical Sciences, Public Health, Co-Infection, Policy の大見出しのもとにプログラムが組まれていた。筆者は主にワクチン関連の演題を聴講した。

それぞれの日の最初には Plenary Talks のセッションが設けられており、2日目の最初にはインフルエンザ予防への挑戦とユニバーサルワクチンについての現状報告がなされた。2日目全体としては、ワクチンの有効性に関する疫学的な発表が多くあった。その中で、現在問題になっている点として、H3 ウイルス Clade の多様性や初めて遭遇したインフルエンザウイルスによる刷り込み現象(Imprinting)に起因するワクチン効果の低下、繰り返し接種の弊害などについての発表があった。また、ハイドロスワクチンとアジュバントワクチンの相対的な有効性の比較に関する演題に興味を引かれた。別のセッションでは、インフルエンザ感染時の二次感染、抗ウイルス薬に対する

耐性、インフルエンザウイルスの糖鎖生物学などの演題が報告されていた。

3日目はモノクローナル抗体を含む各種抗インフルエンザ薬の併用とワクチン製造用の新たな基質細胞に関する Plenary Talks から始まった。後者は河岡先生による発表で、近年卵での低増殖と馴化が問題になっている H3N2 ウイルスを効率よく増殖させる新たな細胞に関する話があり、興味を引かれた。その後の一般演題としては、いわゆる次世代のユニバーサルワクチンに関する演題が多数報告された。ユニバーサルワクチンのプラットフォームとして、ノイラミニダーゼ、T cell エピトープ、Stalk 領域、コンピュータによりデザインされた複数のエピトープからなる抗原などが紹介された。Virology & Pathogenesis のセッションではヒト、フェレットにおけるインフルエンザ感染後の細胞性、液性免疫応答についての発表があった。Clinical Science のセッションでは、薬剤耐性を獲得したウイルスのヒト間での伝搬、妊婦へのワクチン接種についての演題が興味を引いた。